めくりめくる湯けむり幾世
猫舌御免のとろけるあぶる湯
まつしろ女将のしっぽはミス
茶虎の板前包丁いらずの三日月爪
ねこまたバつ尾にわかれる小路
鼠のいたずら　犬のたくらみ
湯めぐり夜歩きご用心

涙もつるりとすべりおち
まだたぐ　ゆかば
まだたぐ　おいで

チントンシャンシャン
チントントントン
キッキチー　キッチチー

湯あがり、格子戸窓を開けて涼んでいると、遠く楽しげな音が聞こえてきた。三味線、小鼓、猫の歌声。どこかの部屋で芸者さんを呼んでいるのだろう。宴のおこぼれに預かりお猪口を舐め、外へ鼻を突き出し夜の匂いを嗅ぐ。木々を通り抜けてきた風が心地いい。

チントントントントン、チントントントン。
まだだぐ　ゆかば、まだだぐおいで。

つ、と戸が開いて、浅黒い肌をした若い手伝いの坊やが足音を立てずに入ってくる。
「お銚子いかが」
「ありがとう。ねえ、聞いてごらん。いい音だね」
「姐さん方を呼びましょうか」
「いや、これくらいの距離がちょうどいい。もう私の酒も終わりでいいよ。君も休みなさい」
「はい」
鶏をまる飲みにしてしまえそうなあくびをひとつ、坊やぐるりと身を回して真っ黒な丸かたまりになるや、ストンと寝息を立て始めた。
坊やのくれた酒を注ぐ。
キッチチー、涙もつるりとすべりおち。

ストンと眠るもいさなな獣。
実にいい夜だ。
こんな時を過ごすのも、すっと待っていた。

メイクが落ちないの。
洗っても、洗っても。
まつ毛が重たくて唇がひび割れて裂けそう。
素顔なんてもう何年も見てないし。
オイルも石鹸も役に立たない。
ネイルなんて、見て。層になって尖って、握手するとひとを怪我させてしまう。
ありがとう、やさしい仲居さん。でも、手拭いじゃ落ちないと思う。
ねえ、どこかで会ったことある？
仲居さんの緑色の目、すごく懐かしい。とってもきれいだね。
あなたの手があたたかいからかな。何年ぶりかな、こんなほっとした気持ち。
なんでも話せてしまえそう。
まるであの子と一緒にいるみたい。
うそ、不思議。ネイル落ちたね。魔法みたい。
ありがとう。
もう少し、お話ししない？

猫又温泉郷へようこそ

ペーパーウェル 05 配信参加作品
2020 年 11 月 21 日発行
著　　かくら こう
発行　おはなしの喫茶室
Twitter@ohanasi_cafe
https://www.kakura-ohanasicafe.com/
©2020 Kakura Kou

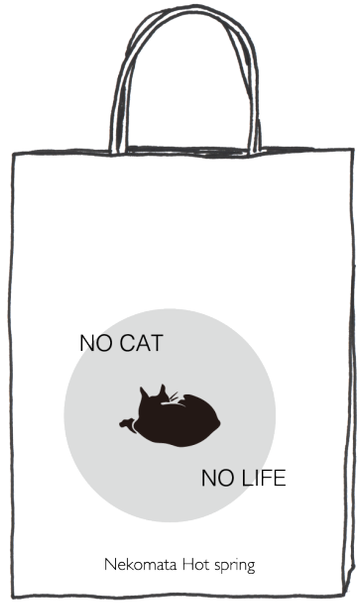
猫又温泉郷へようこそ

カランコロン、カランコロ。坊やをお供に湯めぐり。
手拭いを肩に引っかけ温泉街を歩いていると、楽士一座に囲まれた老婦人が前からやってきた。三角耳やしっぽの生えた楽士たちは老婦人の周りを楽しげに踊り回って楽器を奏でる。キッチチー、キッチチー。いつだか聞こえてきた夜風の音楽はこの一座だったのかもしれない。ひととすれ違う時には老婦人がそれとなく一座に道を開けさせて、誰もが楽しく一同を見送った。

土産物屋で再び老婦人と行き合った。にぎやかな彼らの姿は見当たらない。彼女はすれ違っただけの私を覚えていたらしく、親しげに頬をゆるめた。
「さっきは騒がしくしてごめんなさいね」
「とんでもありません。もしかすると、またたびの宿に泊まっておいでじゃありませんか？」
「あら、もしかしてあなたも？」
「やっぱり。実は、このあいだ、密かにお歌のご相伴にあずかってまして」
「まあ、ごめんなさいね。うるさかったでしょう」
「湯あがりの晩酌に、いい思いをさせていただきました。宿にも町にも馴れてらっしゃるようですけど、ご常連ですか？」
「そうね。もう何度も通ってる。あなたは初めて？」
「はい」
「そう。まだお若いから、これから何度も行き来できるわ。私はそろそろ終わり」
話をしながらも老婦人はあれもこれもと土産物に手を伸ばす。すっかりカゴは山盛りだ。
「終わりといいますと」
「あの子たちが屋敷を用意してくれたの。いっしょに暮らそうってね。私ももう歳も歳だし、身よりもないしね。挨拶回りをしたら、こっちに来ようと思って」
婦人が会計を済ませると、どこからともなくわらわらと楽士一座が現れてたくさんの買い物袋を宿へと運んで行った。
「あらまあ、まったく。鰹節をあげたみたいにはしゃいじゃって」
「あなたのことが好きなんですよ」
すると、彼女はにっこりと笑った。
「ええ、知ってる。でもね、これは自信をもって言える。私の方がずっとあの子たちを大好きよ。あなたもそうでしょう？」
尋ねられて、坊やを見た。坊やは戸口の近くにあるおもちゃの棚に釘づけになっていた。
「じゃ、これで。またお会いできたらうれしいわ」
「ぜひ。またいつか」

チントンシャンシャン、チントンシャン。
またたびゆかば、またたびおいで。

セミの抜け殻を土産に選び、坊やの頭をひと撫でして店を出る。坊やはすぐに追ってきて、私の側をすり抜けて前を行く。
拾って七日もしないうちに空へ旅立ったあの子に、私は名前をつけられなかった。「坊や、坊や」とだけ呼びかけた。どうにもできなかった。細ってゆく火を前に、なにもできなかった。
袖を引かれてハッとする。
坊やがきゅっと握ったちいさな手を向けてきた。
「これ、お家で待ってる姐さんにあげてください。お土産です」
パッと広げた手には白鼠が横たわっている。
「坊やが捕まえたの？」
坊やは得意そうに笑った。



 ©2020 Kakura Kou